

第12回世界ポスタートリエナーレトヤマ2018 IPT2018 第一次審査結果



富山県美術館では、3年に一度開催するポスターの国際公募展「第12回世界ポスタートリエナーレトヤマ2018」(会期:2018年8月11日～10月8日)の入選作品を決定する第一次審査会を 5月31日、6月1日に開催しました。(審査員:左より渡邊良重氏、三木健氏、浅葉克己氏、松永真氏、藤崎圭一郎氏、色部義昭氏、雪山行二氏)

これまでの紙媒体による応募3部門(A既発表作品、B①テーマ『Beyond』、B②テーマなし自主制作)をベースとしながら、今回はじめて30才以下(1988年以降生まれ)の若手を対象としたデジタルデータ応募のU30部門(テーマ『Beyond』)を設け、募集を行いました。

その結果、AB両部門あわせて47の国と地域から、総数3,239点の応募が寄せられ、厳正な審査の結果、376点が入選となりました。

なお、入賞作品を決定する第二次審査会は、8月上旬開催を予定しております。

[IPT2018 入選者 A 部門](#) [PDF]

[IPT2018 入選者 B1 部門](#) [PDF]

[IPT2018 入選者 B2 部門](#) [PDF]

[IPT2018 入選者 U30 部門](#) [PDF]

IPT2018第一次審査 審査員コメント(審査員名50音順)

浅葉克己(グラフィックデザイナー)

ポスターは旗のようでもあり、心の叫びのようでもある。綿密に計算された緊張感あふれる質の高い作品。筆で一気に心の向くままに表現された作品。ドカーンと写真爆弾を炸裂させたようなアイデアあふれる作品群。

この時代に皆が求めているような、大きなテーマが決まった。「Beyond」あそこの、そのむこうの。一般の人々の多くが IPT に集まったポスターを見ても、このテーマが頭の中で渦巻いて、デザインの何かを越えるような作品を選ぶような気がする。スイスからインボーデン氏が来る。ポーランドからムオドジェニェツ氏が来る。2 人とは AGI(国際グラフィック連盟)などの世界デザイン会議で顔を合わせている。彼らの深い視点がどこに向けられてくるのか、今から楽しみにしている。ポスター表現の未来がここから見えて来る。

色部義昭(グラフィックデザイナー、アートディレクター)

成熟したヨーロッパの小都市のような富山で、ポスター審査することに深い意義を感じた。東京や大阪といった大都市では、作品と関係する場や作者からの引力が強すぎる。富山は、世界中から集まるポスターをフラットな目線で評価するには丁度良い距離感とスケール感の街である。東京で評価されているインパクトの強い作品が全く票を得ず、ほとんど評価されていなかった不思議な世界観をもった作品が大きく票を得たりする。時折起こるその逆転現象の中にも IPT の存在意義を見つけることができる。3,239 点のポスターは、課せられたテーマや条件は実に多様であり、審査員としてそれらに優劣をつけるには、明確な指針が必要とされた。私自身は、わかりやすさよりも独創性や表現の強度や深度、テーマとの向き合い方、更に構造やディテール、物性などの各要素を通じて、一枚のポスターとして強い存在意義が感じられるかどうかを評価の指針とした。2 日間の濃密な審査から解放された今、国際審査員による第二次審査の最終結果が楽しみでならない。

藤崎圭一郎 (デザイン評論、東京藝術大学デザイン科教授)

ポスターは駆け引きの媒体です。「おお、こう来るか！」とうなったり、「何これ？」と思ってじっくり見ると「ああ！そういうことか」と納得させられたり、最初は「ふーん」と見過ごしても、なんか気になって後戻りさせられたり、意味がわからないまま、しかし、いまだにビジュアルが脳裏から離れなかったり……。審査は、そんな作品と見る側の良い駆け引きの連続でした。ポスターは「伝えること」が大前提のメディアですが、わかりやすさの追求だけでは陳腐な表現になる。ポスターが広告媒体の主役の座を降ろされたのは、ネットやテレビのせいではなく、現代の広告が駆け引き不要のわかりやすさばかり求めるからなのかもしれません。コミュニケーションメディアとしてポスターの可能性は広大であると審査を通じて実感しました。ポスターが死んだなんて誰が言った。ポスターってこんなに面白いじゃないか！

松永 真(グラフィックデザイナー)

急激なメディアのデジタル化が進む中、応募作品の集まりが大変危惧されていましたが、想像を超えて47の国と地域より3,239点もの作品が集まって、安堵したところですよ。作品の水準も高く、7名の国内審査員によって厳正で丁寧な第一次審査が2日間に亘って行われました。その結果、約1割にあたる376点の入選が決定しました。

第二次審査は、8月の初めにスイスとポーランドにより2名の国際審査員を迎えて、第一次審査員の代表3名と共に各賞を決定します。どのような議論の下で、どのような作品が賞を射止めるのかとても楽しみです。

また、新装なった富山県美術館は、建築家・内藤廣氏設計による広くて美しい見事な空間です。そんな中で初めて“第12回世界ポスタートリエナーレトヤマ”が開催されて、世界のポスターが一同に並ぶことは、それだけでも記念すべきことであると、今からとても楽しみです。

三木 健(グラフィックデザイナー、アートディレクター)

新しくなった富山県美術館での世界ポスタートリエナーレトヤマ2018の一次審査が始まった。1シリーズ3枚、3シリーズまで応募が可能。3年ごとに開催されるトリエンナーレ。1985年の開催で今年で33年目を迎える。

見事に揃った3のゾロ目。

そんなわけで僕の審査のものさし3箇条をお知らせしておく。

- 1.視覚言語が明快である。
 - 2.不思議な造形力でビジュアルショックを感じる。
 - 3.時代に新しい風穴をあけるような魅力がある。
- このいずれかがないと判断すれば一票を投じる。

ちなみに、今年初めて審査をする僕もまた三のつく人。

渡邊良重(グラフィックデザイナー)

国内外から集まるポスター群にどのように票を入れていくかの戸惑いが、少なからずありました。完成度は高いが既視感のあるもの、新しさを求めているように見えるが完成度の低いもの、もちろん両方を兼ね備えていると思うものもあります。日本に生きているわたしの今現在の良し悪しの判断、好き嫌いの感覚に左右されて票をいれていくこととなります。審査員もバラエティに富んでいるので価値観もさまざまですが、これが審査というものなのだと思います。

あとは二次審査の審査員の皆様にたくすこととなりますが、どのような結果になるかとても楽しみです。

雪山行二(富山県美術館 館長)

1985年に始まった「世界ポスタートリエナーレトヤマ」は、今年で第12回を迎えるが、今回新たに導入されたのが、30歳以下の主に新人・学生を対象としたデータによる応募枠「U30」である。これは紙媒体による応募に比べて時間的・経済的負担を軽くすることで、若い世代のIPTへの参加

を促したいという意図によるものであるが、この枠に 422 点の応募があったことにより、データでの作品募集がこれからは避けて通れない方法であることを実感させられた。

作品募集の期間が前回公募より短かったことも一因と思われるが、応募総数が 3,239 点と前回はやや下回ったとはいえ、寄せられた作品の質は概して高かったことが大変心強く感じられた。今回、B①部門(未発表作品、テーマ設定あり)と U30 部門のテーマを「BEYOND」としたが、各作品には様々な工夫や解釈が見られ、このテーマは適切であったのではないかと思う。

「ポスターの時代」が過ぎ去ったと言われても、なお多くの人々を魅了し続けるポスターの価値を、将来に向けてどのような形で継承し、発展させるのか、皆で考えていきたい。